名古屋女子大学　紀要　59（人・社）171～181　2013

教育実習を通した学習継続意志の形成

－実習課題と自己評価に着目して－

桝川　知

Formation of Sustainable Motivation for Learning through Practice Teaching

− Focusing on Practice Teaching Assignment and Self-Evaluation −

Satoru MASUKAWA

Ⅰ　教育実習の現状と課題

1　はじめに

教育実習は、「Think like teacher」と言われる。「教師のように考える」ことができるようになって帰ってくることに大きな意義がある。大学において学んだ一般教養、専門教養、教職教養を、教育の現場で総合的、一体的に生かして働かせ、児童の人格形成はもちろん、自己の望ましい教師像を形成する重要な課程である。また、そこで習得した問題を大学の学習や研究に理論的に再構成させることを目的としている。

藤枝静正（2007）は『教育実習学の基礎理論研究』において、戦後のわが国における「教育実習」の定義とかかわって次のことが確認できると記している。①現実の学校環境における子どもとの直接的な接触をとおしての教職的体験・実地経験を重視する。②理論に基づいた教育の実際的研究と経験を重視する。また、実習の中から教育課題を発見することを重視する。③実習の具体的な内容として、観察・参加・実習を含む。また、単に授業だけでなく教師として必要なあらゆる経験を含む。④経験豊富な指導教員による十分な指導を必要とする。⑤教育精神の自覚、体得、確立を含むべきである。⑥教師たるに必要な基盤、すなわち実践上、研究上の基礎的能力と態度を養う。⑦理論と実践の結合を期待する。⑧知識や理論を現実に適用する能力や問題解決能力を重視する。⑨教育技術の錬磨を含む。⑩教職への能力・適性について自己確認する。

この教育実習を通して、学生は実に大きな学びをしている。授業に関して言えば、今まで自分が座って受けている授業のイメージから、自分が教壇に立ったことを想定したイメージに変化していく（教職意識の変容）。また、一つの授業を観る視点の観点が増え、自分が授業者として立つときにどうなのかと主体的に考えながら、教師として授業を観ることができるようになってくる（教師力の形成）。さらに、実習において実践的・技術的な内容を学び、その背景にある理論的な学習内容を身に付けたいと考えるようになる（学習意識の変容）。このように、教育実習は、有能な教師たるべき修練の機会であるとともに、将来教師として進むべきか否かを決定する重大な機会でもある。

しかし、実際の教育実習は、実習先の小学校に学生の指導を「お願い」し、学生は実習に「行かせていただく」といったようなスタンスをとらざるをえないのが現状である。文部科学省の＜通知＞（2006、7）には、「教育実習の実施に当たっては、指導担当者である大学の教授（助

教授、講師）が実習校の教職員と緊密に連絡して計画し、協同してその指導に当たり、大学がその責任において単位を与えるものである。したがって45時間（１単位）以上の授業課程は、常に大学の教授の管理下におかなければならない。」とある。教育実習を始めとする教員養成の質保証に応えるためにも、実習生の学びの責任は大学にあることを再確認し、事前指導、訪問指導、事後指導のあり方を再度検討する必要があると思われる。本稿では、教育実習後の学習継続意志の質的変容に目を向け、そのための具体的な手立てを考えてみたい。

２　本校の実態

（１）事前指導

教師という職業は、教育者としての使命感と深い教育的愛情とを基盤として、幅広い一般的教養、教科についての専門的学識、教育の理念や方法および人間の成長・発達についての深い理解、優れた教育技術等が総合されていることが求められる高度な専門的職業である。まずこのことを教育実習生に強く意識させる。さらに、大学の講義や演習だけでは得られない教師として最も大切な望ましい教育者としての精神や態度等の習得を図り、自己の望ましい教師像を形成する重要な機会が、この教育実習であることを理解させる。また、事前のオリエンテーションでは、①教育実習の意義や目的の確認、②教育実習の内容の概要、③教育実習生の実習校での勤務心得、④実習校でのこれまでの教育実習の反省と期待、⑤実習校での研究のあり方および終了後の大学での研究の継続について説明を行っている。さらに、「教育実習中に習得すべきこと」として、①子どもの発達や心理並びに学校生活の実態の把握と理解、②教材研究・学習指導法の研究並びに実践、③生徒指導と学級経営の研究並びに実践、④道徳、外国語活動、総合的な学習の時間、特別活動（学級活動、児童会活動、クラブ活動、学校行事）の研究並びに実践、⑤学級・学校事務、PTA活動、地域社会などの研究並びに実践、⑥教師のあるべき姿についての理解（勤務・研究活動）を提示し、学生が各自の目的と自らの特性、そして大学での専門研究を考慮して選択することとしている。なお、研究成果については、実習後、各自が報告書を提出するようになっている。

（２）訪問指導

教育実習中の実習校と大学との数少ない交流に訪問指導がある。訪問担当者として、教職科目担当者と教科科目担当者が手分けして実習校訪問を行っている。訪問地域としては、東海三県を含む近隣県を基本に、要請のある実習校については、可能な限り訪問するようにしている。実習校訪問は、原則１回であり、訪問時には授業参観、実習生との面談・指導、それに可能であれば指導教官との面談も行っている。訪問時の実習生に対する指導内容としては、参観した授業に対しての指導を中心に、服務や授業方法、生徒指導、そして実習生のストレスの把握等に重きを置いている。

（３）事後指導

実習終了後、代表実習生の成果報告を含むまとめの会を行っている。実習で感じたこと、新たに発見したこと、困ったこと、これからの学びに生かしていきたいことなどをグループで話合い、全体での確認を行っている。ただ、限られた時間しかなく、十分な学びの確認と次のステップへの課題づくりにまでは至っていないように感じられる。

３　教育実習生の感想

教育実習を終えた学生全員に、実習中の学びや感想、これからの抱負等を簡単に書かせ発表

してもらった。以下、そのまとめである。(学生の意見を、①良かったと思ったこと、②困ったこと・嫌だったこと・疑問に思ったこと、③要望することに３分類し、さらに、それぞれを＜生徒指導関係＞、＜学習指導関係＞、＜実習態度関係＞に分けた。一部抜粋)

資料１　教育実習を終えた学生の感想―良かったと思ったこと

①　良かったと思ったこと

＜生徒指導関係＞

・子どもたち一人一人の性格に合わせて対応する大切さを学ぶことができた。
・２年生を担任しましたが、さまざまなバックグラウンドを抱えた子がたくさんいて対応の仕方など勉強になりました。
・子どもたちと実際触れ合って１か月間、一人一人の子どもと向き合う中で、その大切さや難しさを学ぶことができた。

＜学習指導関係＞

・現場の先生方の生の授業を見て刺激になった。また、実践的なスキルを学んだ。発問の仕方、答えを導き出させる話法、視野を広く行動することの大切さ、叱り方。
・ADHDの子の対応を実際にすることができて良かった。
・実際に授業をして自分の力で何が足りないかとか、どのように教えればよいのか等工夫しなければならないことが分かった。
・ベテランの先生の授業を実際に観察することができ、そこから、自分の力にしたいことを吸収することができた。
・大学の授業だけでは分からない子どもの様子が分かってよかった。
・授業をやる前の教材研究、朝の会、帰りの会に話すことなど、「子どものために」という視点で考えると、「てきとう」は許されないので、たくさん時間を費やして準備しました。その毎日の準備の大変さや面白さを現場の先生たちから学べました。

＜実習態度関係＞

・実際に子どもの前に立ってみて、今まで学校で学んできたこととは違う責任や先生という存在の大きさを実感しました。
・先生という立場を体験することができ、教えるということの責任、育てるという意識を知ることができた。
・先生方の一日の仕事の流れや子どもに対する姿勢、指導の仕方を知ることができた。
・授業以外での教師の仕事を見て、新たな魅力を見つけた。

資料２　教育実習を終えた学生の感想―困ったこと、嫌だったこと、疑問に思ったこと

②　困ったこと、嫌だったこと、疑問に思ったこと

＜生徒指導関係＞

・子どもたち一人一人への対応の仕方で困りました。自分で全て判断できるわけではないので困りました。どこまで助けていいのか、やらせていいのか。そして叱り方。
・実習生がクラスに入ることで、普段家庭で十分甘えられない子どもがその場所として何でも実習生に助けを求めてきた。

・小学２年生を担当したが、男の子たちがけんかをしてしまい対応に困った。指導教官の対応を見て勉強になった。

＜学習指導関係＞

・発達障害と疑われる子への指導。
・子どものレベルに合った指導の仕方が難しく、どのようにすれば良いのかが困った。
・一日５時間も授業があるのに、先生たちはいつ教材研究や事務をしているのだろう。

＜実習態度関係＞

・提出物がとても多く、全て記録（観察や参加など）が手書きだったので、大変で、授業の準備が夜中までかかって少し困った。
・実際の現場では、実習生を喜んで受け入れてくれる先生とそうでない先生がみえると言われました。確かに忙しい職場であるので、知識も技術もとぼしい私が入って邪魔になるだけだと不安ばかりで、いい動きができなかったと自覚しています。

資料３　教育実習を終えた学生の感想―要望すること

③　要望すること

＜生徒指導関係＞

・学校での細かなルール、担当したクラスの児童以外でも注意しなければいけない児童をしっかりと教えてもらえるとよかった。
・けんかの対処法など、現場で使える指導法をもっと教えてほしい。

＜学習指導関係＞

・観察記録や参加記録の書き方をもう少しじっくり学校で教えて欲しい。
・低学年・中学年・高学年の授業を自分の担当学級と比較するためにも、もう少し観察できるとよかった。

＜実習態度関係＞

・先輩方の話を聞く機会が多いといいと思う。
・訪問担当の先生と少し連絡が取れるようにしてほしかった。
・訪問してくださった先生との時間が合わず、自分の授業について指導してもらう機会がなかったので、不安になった。

資料１～３から読み取れることとしては、＜教職意識の変容＞に関しては、「一人一人の子どもと対応することの大切さや難しさ」、「『てきとう』は許されないこと」、「育てるという意識の大切さ」等の教職意識の醸成という学びがあった。＜教師力の形成＞に関しては、「子どもの反応を見ることの大切さ」、「計画通りに進まない現実」、「授業での工夫の大切さ」、「発問・話し方の大切さ」等の教科指導力の獲得という学びがあった。＜学習意識の変容＞に関しては、「児童心理について学びたい」、「子どものレベルに合った指導の仕方」、「けんか・いじめへの対応の仕方」等の実践的・技術的な内容とその背景にある論理面の追究という学びがあった。しかし、「要望すること」の意見に代表されるように、実習までの大学での学びが、学生にとって実習現場に直結しにくいものであったことがうかがえる。小学校での一日の勤務の流れや予想される児童の動きなど、具体的な場面を想定した学びが必要であったのではないかと考えられる。学生自身が感じ取った課題と学び取った成果とを共に生かし、将来教職を目ざす学生に

とって、この教育実習での体験を今後の学習課題として意識させ、学びの継続意志をさらに質的に変容させていくことが重要となる。

Ⅱ　受け入れ校の評価・要望

１　受け入れ校の評価

では、そんな実習生を受入校はどのように捉えているのであろうか。過去５年間の実習生の状況を「教育実習評価票」をもとにみていく。なお、評価票は、評価項目それぞれがＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ（不合格）の４段階で評価させている。

【平成19年度～23年度教育実習評価票集計】
＊各年度の実習生は、３年生の秋実習生と当該年度４年生時の名古屋市春実習生の合計
＜生徒指導＞：・児童・生徒の観察・理解　　・指導能力　　・指導態度
＜学習指導＞：・教科等に関する能力　　・指導能力　　・指導態度
＜実習態度＞：・実習生としての自覚・教職に対する態度・実務能力・教育実習記録等
＜総合評価＞：・上記３項目の総合結果としての評価
（なおすべての項目についてＤ評価は０％であったため省略する）

表１　平成19年度～23年度教育実習評価表集計結果

年度＼評価	評価項目	A	B	C
平成19年度	生徒指導	42%	58%	０％
	学習指導	42%	58%	０％
	実習態度	82%	17%	１％
	総合評価	53%	47%	０％
平成20年度	生徒指導	45%	53%	２％
	学習指導	45%	55%	０％
	実習態度	84%	15%	１％
	総合評価	64%	35%	１％
平成21年度	生徒指導	44%	54%	２％
	学習指導	48%	50%	２％
	実習態度	85%	14%	１％
	総合評価	66%	31%	３％
平成22年度	生徒指導	35%	61%	４％
	学習指導	50%	48%	２％
	実習態度	81%	17%	２％
	総合評価	58%	41%	１％
平成23年度	生徒指導	35%	65%	０％
	学習指導	41%	59%	０％
	実習態度	90%	10%	０％
	総合評価	60%	40%	０％

上記の表１に示すとおり、実習態度に関しては、常に高い評価（Ａ評価が81%～90%、Ｂ評

価が10%～17%、Ｃ評価が０％～２％）を受けている。これは、学生個々の質の高さもさることながら、免許取得のための教育実習ではなく、教師になるための教育実習だという学生の強い意志の現れと見て取ることができる。一方、生徒指導・学習指導に関しては、やや力不足が見受けられる。具体的には、生徒指導についてはＡ評価が35%～45%、Ｂ評価が53%～65%、Ｃ評価が０％～４％であり、学習指導についてはＡ評価が41%～50%、Ｂ評価が48%～58%、Ｃ評価が０％～２％となっている。事前の大学での学びを論理的な講義のみではなく、より具体的な現場対応の演習を含めた学びへと転換していく必要を感じる。

２　受け入れ校の要望

一方､｢教育実習評価票｣に記載されている個々の特記事項には､以下のような記述があった。

【教育実習生の実態】

（平成19年度から平成23年度の教育実習評価票特記事項より　一部抜粋）

資料４　教育実習評価表に記載された教育実習生の実態

＜生徒指導＞：児童の観察・理解、指導能力、指導態度
○誠実に子どもに接することができた。
○ひとりでいる児童を気遣い、よく声をかけていた。
○いろんな場面での児童観察を積極的に進めていた。
▲児童とのかかわり方、教師としての毅然とした態度について、磨くべき所と感じた。
＜学習指導＞：教科等に関する能力、指導能力、指導態度
○教材研究をしっかりとし、十分な教具を作成した。
○指導案、板書に工夫が見られた。
○一人一人をよく観察し、性格や学習状況、理解度に合わせた支援を心掛けていた。
○観察で見つけた効果的な技術等を取り入れ、授業をするたびに成長していった。
▲児童の発言を生かした授業展開に課題があった。
＜実習態度＞：実習生としての自覚、教職に対する態度、実務能力、教育実習記録等
○朝早くから校門に立ち、あいさつを交わしながら子どもたちを迎えていた。
○教職をめざそうとする姿勢、意欲的に吸収していこうとする態度がすばらしかった。
○あいさつ、服装などに、よく気を付け、実習態度もたいへん真面目であった。
○実習を通して、教師としての資質を高めたいという前向きな姿勢が感じられた。
○生徒指導、学習指導における児童とのかかわり方が極めて適切であり、将来教壇に立って欲しいと思われる実習生であった。
○謙虚な態度で実習に臨み、人の言葉に素直に耳を傾け、よく努力した。
▲実習記録の誤記や子どもへの接し方に、心構えと態度の甘さが見られた。

資料４にまとめたように、自分なりに考え真剣に教育実習に取り組む学生の姿を見て取ることができる。その一方で、子どもへのかかわり方や授業展開、言葉づかい、事務処理に関する課題も指摘されている。

なお、受け入れ校に関する調査研究では、以下のような報告がなされている。冨江英俊・川島眞・五十嵐由利子（2010）『受け入れ校からみた教育実習の現状と課題』では、実習校から大学への苦情・要望として、①教員志望の学生を送って欲しい、②教科指導等の徹底、③社会

人としての基本的マナー、心構えの徹底。あるいは、柴山直・高橋桂子・鋤柄佐千子・五十嵐由利子（2002）『学校インターンシップ導入に関するアンケート調査の報告』では、①教育実習生の存在が学校に活気をもたらす一方で、②子どもたちが落ち着きがなくなる、③学習進度が予定より遅れる、④実習受入校側の担当者の負担が大きい、⑤指導案作成技術を始めとする指導技術の一層の向上、⑥礼儀作法など社会人としての基本的マナーの修得、を促すプログラムの整備が急務であること。また、各大学における教育実習生の問題に関して、藤枝静正（2007）『教育実習学の基礎理論研究』は、①教育実習に対する学生の意識の問題、②教育実習生の実習態度、③教員志望でない学生の教育実習の問題、④教育実習不適応学生への対処の仕方、⑤学生の意欲をどう高めるかの問題、⑥本当の教職希望者のみの教育実習についての検討、⑦教育実習を通して教職意欲を早期から高めるための工夫、⑧教育実習に消極的ないし不安を感じている学生の指導のあり方、⑨教員免許を資格の一つとして捉えている学生への指導の問題、⑩実習辞退者への対応の問題、⑪教職に就かない者が実習に行くこと、⑫実習受講生のうち多くが教員採用選考試験を受けないこと、⑬基礎学力の不足、⑭教員としての資質・適性の見極めが困難、⑮実習期間中のトラブルの増加、⑯実習校の評価基準の較差を挙げている。

このように、教育実習に関しては多くの課題が現存するものの、本校においては学生の実態を考え、教員採用を目ざした「養成」に力点を置いて、学習継続意志をキーワードに教育実習を再検討していくことが重要であると考える。

Ⅲ　学習継続意志の形成

1　学習継続意志

教育実習の意義の一つとして、教育理論通り実践できなかった事実を基に、今後の教師としての力量形成を図るための探究課題を見つけられる良さがある。実習において指導教官や他の先生方から実践的な内容や技術的な内容を学んだとしても、それを自信をもって自分自身が実践していくための理論的な背景が欲しいと考えるようになる。これが、学習継続意志を形成するスタートになる重要な要因であると考える。

教職をめざす学生にとって、学習継続意志は、＜教職意識の質的変容＞、＜教師力の質的変容＞の両面から捉えることができる。この教職意識と教師力は、それぞれに理論的な学習内容と実践的な学習内容をもち、相互に影響し合いながら理想の教師像を形成していくことになる。

その形成過程は、＜動機づけ＞→＜方向づけ＞→＜価値づけ＞→＜手立ての獲得＞→＜学びの再確認＞→＜自己決定＞→＜実践力の醸成＞のサイクルによって形成されていくと考える。

＜動機づけ＞は、「教師になりたい」という漠然としたものから、教育実習を経て、「こんな先生になりたい」というより具体的な姿をとるようになる学習への動機づけが学習者以外の人や刺激によって引き起こされ、学習行動が単にその手段とされる外発的動機づけがまずなされる。と同時に、学習への動機づけが学習者自身によって自発的に起こされ、学習行動そのものが関心の対象となる内発的動機づけがなされるようになる。そのためにも、学習する内容に対する肯定的な価値観を高めることが重要である。本人が持つこの価値観が動機づけを規定するものになるからである。

＜方向づけ＞は、自分自身の能力を多面的に自己点検し、何が得手で、何が不得手なのかを理解することから始まる。その判断に大きな影響を及ぼすものが実際に教育実習を通して、子

どもたちと向き合い、現職の先生方の指導の姿を通してつかみ取った自らの教師になるための課題であると考える。この教育実習で学び取ったものを上手く広げられるようにサポートしていくことが重要であろう。

＜価値づけ＞は、自分なりの理想の教師像を描いたときに、これから自らが課題として取り組もうとしていることが、いかに重要であり、必要であるかを自己確認することである。学ぶことを学習者が肯定的に捉えることが学習の成否に繋がっていく。そのためには、学習者が成功期待感を高め、目標意識を持ち、自身に関連が深いと感じられる内容を学ぶことが大切である。

＜手立ての獲得＞は、自らの課題を解決するために、どのような取り組みが必要であり、また可能であるかを自己確認することである。例えば、演習等では仲間同士のやりとりが活発になされやすい。このやりとりは、知的好奇心が高められやすく、理解も深まることが多い。

＜学びの再確認＞は、課題解決のために自ら学んでいることが、また学んだことがどれだけ自分自身の本物の力となっているかを自己確認することである。学習者自身が学習を振り返り、自らの学習について肯定的に評価できるようにすることが重要である。

＜自己決定＞は、課題解決のための学びを通して、いかに自分自身が教師として高まってきているかを自己確認するとともに、学習行動の方向性と強さを決定していくことである。これは、新たな学びの意図の形成に繋がっていくものである。

＜実践力の熟成＞は、一つの自己課題を解決し、次の新たな課題を見つけ出し、着実に学びを深めることを通して、現場実践者としての教職意識の変容と教師としての力量形成を自ら確認できることである。これは、新たな自分なりの理想の教師像を形作っていくことになる。

このような学習継続意志の形成を効果的に進めさせるために、実習生自身による自己評価が必要であると考えた。そのための手立てとして、「教育実習研究課題票」と「教育実習自己評価票」の活用に思い至った。なお、「教育実習研究課題票」及び「教育実習自己評価票」では、チェック法などによる点数化などを軸に行われるパラディグマティク評価（枠組み的評価）によらず、記述式のエピソード法などを軸に行われるナラティブ評価（物語的評価）を用いることとした。「教育実習研究課題票」・「教育実習自己評価票」に対する批判的分析と反省的思考を通して、問題状況の多面性・多層性を理解し、対処行為に柔軟性や多様性の必要なことを学ばせ、ある問題状況での対処行為のレパートリーを豊かにすることをねらいとした。自立した教師としてその専門性を自ら高めていくためには、実習生に教職意識と教師力に対する自己点検の構えとその対処能力を育成することが、今後いっそう重要になってくると考えるからである。

２　教育実習研究課題票

一般的には、「養成」を担うのは大学であると考えることができるが、今日、名古屋市の「なごや教師養成塾」に代表されるように、教員採用選考試験前に、各自治体がそれぞれに「めざす教師像」を掲げ、「養成」を担う現象が増加している。カリキュラムの問題として、「教師養成塾」をとらえるならば、明らかに大学教育の「理論」的教授よりも、「体験」「実践」が重んじられ、それが現場で生かされるといった意味づけが行われていると考えられる。このような状況の中、教育実習を教師養成の重要な課程と捉え、教育実習を教職をめざす学生にとってより質の高いものとしていくためには、今まで以上にねらいをもった意識的な教育実習への取り組みが求められていると考える。

そのための手立てとして、これまでの大学での講義・演習などの自己の学びと教育実習での学びや疑問、課題を今後の大学での自分自身の学びへとフィードバックさせるものとして＜教

育実習研究課題票＞の活用を考えている。あらかじめ用意した12の研究課題の中から、ゼミナールでの個人研究を考慮しながら、教育実習に出かける前に、事前の目標として具体的な手立て・方法をもった教育実習における研究課題を明確にさせて、意図的な教育実習での実践を促し、その上で、実習後の自分自身に目を向けさせ、課題の達成度はどうか、自分はどのように変わったのか、どのような点ができるようになったのか自己評価できるような仕組みを作っていくことが必要であると考えてのことである。そして、この研究課題に対する自己評価が実習生一人一人に次の学習課題の設定を要求し、教職に就きたいという願いを実現するための学習継続意志の形成、つまり学習への動機づけとなり、教職意識及び教師としての力量形成を目ざす大学でのさらなる学びへと繋がっていくことを願うのである。

資料５　教育実習研究課題票

実習先	
学籍番号	氏名
研究課題 ①子どもの発達や心理に関しての研究　②学校生活の実態把握に関しての研究 ③教材研究　④学習指導法の研究　⑤生徒指導・学級経営に関しての研究 ⑥道徳に関しての研究　⑦外国語活動に関しての研究　⑧特別活動に関しての研究 ⑨総合的な学習の時間に関しての研究　⑩学級・学校事務に関しての研究 ⑪地域社会との連携に関しての研究　⑫教師のあるべき姿に関しての研究 ⑬その他	
研究課題番号　（　　）	
研究課題テーマ	
手立て・方法	
考察	

３　教育実習自己評価票

教育実習を通して、子どもたちとの関わりの中から、また指導教官などの実践を参観することにより、具体的にどんな授業技術を学んだのか、どんな授業技術を身に付けたのか、あるいはどんな生徒指導の方法を学んだのか、具体的に取得した技術が可視化できるような報告書が必要であると考えた。と同時に、これから教職をめざす自分自身にとって、どんな学びが必要なのかを確認することが重要であると考えた。その手立てがこの＜教育実習自己評価票＞である。この記述による自己評価を通して、学習継続意志の形成・質的な変容がなされ、以後の学習への取組みの連鎖を願うのである。

資料６　教育実習自己評価票

学籍番号　　氏名
①　教育実習で学んだことは何ですか。 ②　教職について考えたことは何ですか。 ③　実習までに履修した教科・科目で、実際に役に立ったものは何ですか。 ④　実習をより充実したものとするために、事前に準備しておけばよかったこと・学んでおけばよかったことは何ですか。 ⑤　教育実習中に受けた注意があったら書いてください。 ⑥　教育実習中に困ったことは何ですか。具体的に書いてください。 ⑦　教育実習中に難しいと感じたことは何ですか。今後、どのように解決しようと考えていますか。 ⑧　教育実習を終えて自己評価すると１０点満点で何点ですか。また、その理由を書いてください。

Ⅳ　まとめと今後の課題

教育実習が基本的に目的としていることは、大学の講義・演習、書物でこれまでに学んだ教育に関する理論を、学校という現場に実際に適用してみて、実証的に学習することである。それによって、実習生個々の教職意識や教師力の実態や課題が自己のものとして認識され、それらを形成する教育に関する理論をさらに拡充発展させる糸口をつかむということが期待されているのである。そのために、学生は自己評価を通して絶えず教師としての適性に関する自己理解を深めたり、自分が研究課題として設定した教育実習の目的が達せられているか否かを判断しながら、自己の力量向上に目を向けることになる。この意味で、自己評価は教育実習における必要不可欠な営みであると言える。さらに、この自己評価が、将来教職を目ざす学生を、教師力・人間力向上へのさらなる学習の継続を志向する意志の形成・質的変容へと向かわせることになるのである。この自己評価をより質の高いものとしていくためにも＜教育実習研究課題個票＞、＜教育実習自己評価票＞を大いに活用させていきたい。と同時に、学習への動機づけを規定する教師側の要因にも真摯に目を向け、教え方に関する技術の習熟や態度とも注意を払っていきたい。そして、大学の「理論的」な学びと現場の「実践的・体験的」な学びとを、「目ざす教師像」を基に、学生一人ひとりが繋げていくことができるサポート体制を整えていくことが必要であると考える。

教育実習を通して、教師のように考えることができるようになった、またそうなることが大

切なのだと気付いた学生に必要なことは、それを実践が伴うものに変容させていくことだと言えよう。演習のみならず講義においても、教育現場を意識した模擬実践を通して、少しでも理論との溝を具体的に埋めさせていくことが必要であると考える。各小学校での具体的な実践例を多く提供し、一つ一つの事象について、児童の立場から、保護者の立場から、そして教師の立場から考えさせることによって、教科指導や生徒指導における具体的な対応について、学生に自分自身にとってより良いモデルや多くのレパートリーを獲得させていくことが何より大切なことであると考える。そのための学習プランを演習「教育の方法と技術」の時間を中心に計画し、実践していきたい。

引用文献

１）藤枝静正
『教育実習学の基礎理論研究』（2007）p.138－142，p.75－91
２）冨江英俊・川島眞・五十嵐由利子
「受け入れ校からみた教育実習の現状と課題」『教師教育研究』（2010）p.85－93
３）柴山直・高橋桂子・鋤柄佐千子・五十嵐由利子
「学校インターンシップ導入に関するアンケート調査の報告」新潟大学人間科学部附属教育実践総合センター研究紀要『教育実践総合研究』創刊号（2002）p.75－90

参考文献

１）三島知剛
「教育実習における実習生の学びとその捉え方」『中国・四国地区私立大学教職課程研究協議会会報』(2012)
２）赤堀方哉
「教育実習における訪問指導の充実に向けて」『教師教育研究』(2012)
３）三島知剛・安立大輔・森敏昭
「教育実習生の実習前後における学習の継続意志の変容」『学習開発学研究』(2010)
４）森下　覚・尾出由佳他
「教育実習における学習はどのように構成されているか」『教育心理学研究』(2010)
５）相良麻里
「教育実習に関する効果的な事前・事後教育の検討－実践的指導力の基礎２」『東京家政大学博物館紀要』(2010)
６）丸山真名美
「教育実習前後における教師イメージの変化　－教師イメージ図の分析の試み－」『東海教師教育研究』(2012)